２０２４年１１月２８日 読売東京 朝刊 都民２ １３Ｓ版 ２４頁

大震災で日常一変

文人の武蔵野

金子光晴 ⑥

1920年の年末に海外放浪から帰った金子光晴は、赤城元町（現・新宿区）で借家住まいをしていました。ベルギー滞在の成果だった詩集「こがね蟲」は、刊行前から草稿ノートが話題を呼び、彼のもとには詩人たちが集まり、金子宅を「楽園詩社」として詩誌「楽園」を発行しました。23年7月には「こがね蟲」を刊行します。しかし、9月1日に関東大震災が起こり、定まった場所で展開されていた束の間の日常の崩壊を経験したのでした。

森乾の著書「父・金子光晴伝―夜の果てへの旅―」。父との思い出などがつづられている（武蔵野市で）

新小川町（現・新宿区）に避難した金子は、空き地に目をつけ数百人の避難民に開放し、余震の続く震災後数日間は戸板を敷いて寝起きをしたそうです。その後は東京を離れ、主に関西方面のつてをたどり、流浪の旅を重ね、詩作に耽り、詩集「水の流浪」の大半を完成させます。

24年1月、金子は赤城元町の借家に戻ります。そして3月、東京女子高等師範の学生で作家志望だった森三千代の訪問をうけます。

2度目に会ったときに金子は求婚しますが、三千代には恋人がいました。吉田一穂です。吉田は金子の「こがね蟲」を好意的に評価した詩人の一人でした。何とか整理をつけた2人は、7月に結婚し、東北方面を旅します。9月、三千代の通う学校に金子との結婚、妊娠のことが知れて退学となります。金子28歳、三千代23歳のときでした。

25年2月に詩人の室生犀星を保証人として入籍し、3月には長男の乾が誕生します。名付け親は作家の佐藤紅緑でした。

その後も、伝記的なエピソードとしては、生活の困窮、乾の病気、詩を書く日常と詩集の刊行、三千代と美術評論家の土方定一との恋愛、乾を三千代の実家に預けた上での海外放浪などが繰り返されているのが確認できます。

38年3月、金子、三千代、乾の3人が、吉祥寺の一軒家に住み始めます。そこに落ち着いたとは言えませんが、終生の棲家としたとは言えます。三千代は金子と出会い、詩集などを刊行し、作家になっていきます。乾はのちに仏文学者として大学教授になります。

家族のため金子が編んだ私家版の詩集「三人」の原点は、定住しない日常としての移動にあり、また終生の棲家とした吉祥寺にあると言えるでしょう。

（武蔵野大教授、むさし野文学館館長・土屋忍）

＊

過去の連載は、読売新聞オンラインでお読みいただけます。スマートフォンはQRコードから。